

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-22

アイルランドの文学的伝統とジェイムズ・ ジョイス(5)

YUKI, Hideo / 結城, 英雄

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

74

(開始ページ / Start Page)

35

(終了ページ / End Page)

45

(発行年 / Year)

2017-03-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013647>

アイルランドの文学的伝統と ジェイムズ・ジョイス（5）

結 城 英 雄

1995年前後のジョイス批評

1995年前後にジョイスについての夥しい数の論考が刊行された。文化批評、フェミニズム批評、精神分析批評、あるいはテキスト批評などその幅も広い。ギレスピー夫妻の『ジェイムズ・ジョイスの「ユリシーズ」をめぐる近年の批評』（2000）は、『ユリシーズ』を中心とする、そうした批評の動向を巧みに要約している。ジョイス研究の多様な視点を概略しながら、各論考の意義を現代的な視点で分析してくれている。

これらの批評のうちでもとりわけめざましいのが、歴史や政治の側面からの論考である。たとえば、ジェイムズ・フェアホールの『ジェイムズ・ジョイスと歴史の問題』（1993）、エンダ・ダフィの『サバルタンの「ユリシーズ」』（1993）、ロバート・スプーの『ジェイムズ・ジョイスと歴史の言語——ディーダラスの悪夢』（1994）、イマー・ノーランの『ジェイムズ・ジョイスと民族主義』（1995）、ヴィンセント・チェンの『ジョイス、人種、帝国』（1995）などがある。こうした趨勢の背景には、ニューヒストリシズムの広まりと同時に、アイルランドが興味ある研究対象になってきた事情もある。

アイルランドは1993年にEUに加盟する直前から、経済成長の道を少しずつ歩んできた。その実情はリチャード・カーニーの『変遷』（1988）にも明らかである。トマス・キンセラのイエイツとジョイスの対立に倣い、両者を後進性と近代性の相克として定立し、アイルランドの趨勢がジョイスの近代性へと向かっているとしたのである。カーニーの意識にあるのは同時代のヨーロッパの思想である。彼によるなら、「モダニズムは復興主義の目的とイデオムの両方を否定する。モダニズムは伝統との急進的な断絶を肯定し、文化的な自己照射の実践を是認する。かくしてこれまで受け継がれてきた、アイデンティティの概念も疑問に付される」（Kearney, 12）ことになる。

カーニーの論考に疑義を呈する批評家もいた。その一人がデクラン・カイバードである。彼はカーニーと同じ立場で出発しながらも、イエイツを救出する立場へと変節し、アイルランド人であることはモダンであるといった姿勢を取った。彼によれば、「1916年の復活祭蜂起も『ユリシーズ』もほとんど同じく、政治と文学の領域で、近代性の祝福とその犠牲の補償を達成する、その試みとして解釈できる」（Kiberd, 330）という。カイバードの指摘には模糊としたところがあるが、ジョイスの『ユリシーズ』がIRAの爆弾であるとした『サバルタンの「ユリシーズ」』のエンダ・ダフィや、ジョイスが民族主義者であったことを前提とする『ジェイムズ・ジョイスと民族主義』のノーランの議論と比べるなら、か

なり穏健な響きがする。これら3人ともアイルランドの研究者であり、いずれにとってもジョイスは時代の文脈を語るための手段であったのだ。

その一方、フェアホールは『ジェイムズ・ジョイスと歴史の問題』において、1882年のフィーニックス公園暗殺事件を皮切りに、歴史が虚構化される流れを追認し、ジョイスの作品の背景を整理してみた。またスプーは『ジェイムズ・ジョイスと歴史の言語 — ディーダラスの悪夢』において、1904年のダブリンの状況から判断するかぎり、スティーヴン・ディーダラスの悪夢としての歴史観の背景に、創作時の第一次大戦や1916年の復活祭蜂起の影響が読み取れるとした。さらにチェンは『ジョイス、人種、帝国』において、ポストコロニアリズムに即して、ジョイスのテキストに刻印された、時代の相貌を検討している。こうした実証的な研究と比較すると、ダフィやノーランの論考は、単眼的で強硬な議論にすぎないと思われよう。

ここで必要なのはテキストに即し、具体的な問題に論を差し戻し、その争点を順次検討することである。テキストの背景と創作時の出来事、フェミニズムの観点からの民族主義の矛盾の露呈、英国の文化のアイルランドへの浸透なども課題である。それに加え、マーゴット・ノリスの初読者の経験するテキストへの接近、テキストの真価、物語内の人物間の相互関係など未決の事柄も様々ある。そもそもジョイスがアイルランド人作家であるのは、近年のアイルランドの都合によるもので、ダブリンがテキストの背景とされている行幸を除くなら、ジョイスとアイルランドの接続の糸は切れてしまう。

1904年前後のアイルランドの状況をめぐっては、これまでに詳細な情報が発掘されてきた。その関心を推進したのがほかならぬジョイスのテキストであるが、歴史的な事情が必ずしもテキストとオーバーラップするわけではない。このことも念頭に入れておきたい。『ユリシーズ』について言えば、第12挿話のバーニー・キアナン酒場における、ブルームを標的にした「市民」たちの攻撃がある。これまでの批評においては、「市民」の民族主義が滑稽化されているという指摘の下、この挿話がアイルランドの民族主義一般への風刺として受け止められる傾向にあった。そうした流れを逆転させたのがダフィやノーランの論考であった。1995年前後は、アイルランドのジョイス研究のまさしく開花期であり、百花繚乱の面白さがあった。

にもかかわらず、アイルランド人作家としてのジョイスの位置が、すべて明らかにされたわけではない。偏狭な民族主義に否定的なスティーヴン・ディーダラスについてみても、英国の植民地支配下のアイルランド人問題、あるいはその芸術家の使命に対して、説得力のある応答があったとは思えない。同居人のマリガンとヘインズの会話で交わされる、ワイルドの逆説を超えたという倨傲な発言を聞き流す、スティーヴンの意図も定かではない。そもそも民族について云々しながらも、スティーヴンの内実は、大陸への離脱を渴望しているように思われる。

あるいはレオポルド・ブルームの事情についても、その心情を考察するに至ってはいない。妻の不義密通を前にしながら無為な一日を送るブルームは、英国の植民地支配への反撃の手段を失った、アイルランド人そのままである。この無力な人物を否定し、「市民」の民族主義を再検討する営為は否定しがたいとしても、ユダヤ人の血を受け継ぐ移民としての人物造形を取り込む、そんな柔軟な視点の欠落を

無視することはできない。1993年のEU加盟以降、アイルランドの好景気に沿うかのように、大量の移民の流入があったが、そのことをめぐるブルームとの接続は語られていない。

そしてモリーの不義密通をめぐっても、その動機についてはやはり曖昧なままである。アイルランドの女性は父権制の下、苦渋の生活を強いられていた。モリーが夫との来歴を縷々と語りながらも、その独白には不義密通を犯したことへの罪意識がほとんど感じられない。むしろ彼女は獄舎のような家庭からの脱出を試みようとしている。川の流れのようなその内的独白についても、形式面や矛盾する側面についての納得できる回答が得られているとも思えない。むしろ精神分析的なアプローチを適用してその意識を分析し、その一方でパッチワークとしての創作の過程を論じる向きが多かった。モリーという人物像への関心も薄れてきているらしい。

以上のような問題を残しながらも、1995年を頂点とし、アイルランド人作家としてのジョイスの地位は不動のものとなった。アメリカを拠点とするジョイス研究をアイルランドに奪還するため、ヨーロッパ大陸を中心とする新思想を取り入れ、同時に自国の文化の詳細なデータを基礎に、ジョイスをアイルランド人作家として受容した時期でもある。しかしながら、ジョイスの位置が鮮明になったわけではない。異国の地で暮らすブルームの心境を綴ったジョイスが、アイルランドという国に向け、帰国の願望を抱いていたとは思えない。2002年のユーロの発行、さらに2007年の南北の和平協定を經由し、アイルランドに民族主義と国際主義との間を架橋する視点が要請されることになった。かくしてこの流れに即したジョイス論が必要となる。

変遷期（2008～）

アイルランドの変貌

アイルランドでのジョイス研究の高まりと連動していたのが、まさしくその経済的な高度成長である。この国が「ケルティック・タイガー」という異名を与えられた期間は、1995年前後から2010年までのことである。その結果、アイルランドから他国に移民していた人々のみならず、アイルランドを拠点としようとするアフリカ人、ポーランド人、中国人といった人々の急速な流入があった。その背景にはEUとの連動が大きく関わっていた。この時代、アイルランドのジョイス研究も、アイルランド製という商標を付けられ、世界のジョイス研究を惹きつけた。過去の文献の発掘においては、やはりアイルランドが優位であった。が、ジョイスをアイルランド人作家として奪還するためには、それなりの文脈を提示する必要もあっただろう。

その手始めが『ダブリン・ジェイムズ・ジョイス・ジャーナル』で、2008年に刊行されいまだ続いている。アイルランド国立図書館がその刊行を後援しているが、編集の責任者はユニヴァーシティ・コレッジ・ダブリンのアン・フォガティ教授となっている。簡単そうでありながら、雑誌の継続はそれなりに難題である。逸話を含め新たな光を当てる有益な論考を目指すとなると難しいし、書き手としてのアイルランド人研究者が多いわけではない。ジョイスのテキストに対して、アイルランドの側から提供

できる論題が簡単に見つかるわけでもなかった。そもそも創作時から百年も経過していることもあり、アイルランドからの発信も精彩が欠けているように思われる。そのため記憶という側面から、ジョイスへの歴史的アプローチに傾く嫌いがあることは否めない。それに加え、アイルランドのアイデンティティをめぐる、地域性と国際性の関わりも再考する必要があるだろう。

その一方、アイルランドのジョイスに対する姿勢の変貌もあった。ジョイスの遺跡を訪れる研究者や観光客への便宜のため、ダブリン市内には銘板があちこちに貼られた。スライゴーやゴールウェイのイエイツの喧伝に倣い、少し遅れながらの進行になった。しかしながら、文学的遺産には期待するほどの効果が認められなかった。これも少なからぬ問題である。マーテロ塔も人件費の都合により、閉鎖されたこともあった。あるいはオーモンド・ホテルが解体の憂き目に会い、少ないファンの請願により、なんとか維持されたという経緯もある。このような不安の材料を抱えているのが、まさしく今日のアイルランドの現状である。

ここであえて『ユリシーズ』の3人の主要人物である、レオポルド・ブルーム、モリー・ブルーム、そしてスティーヴン・ディーダラスへのアプローチを検討しておきたい。時代の変貌に即した視点を探り、今後の課題を浮き彫りにしておくつもりである。そのため、疑問に付してきた問題を取りあげ、具体的な争点に目を向けることにする。

ブルームをめぐる民族と国際性

最初にユダヤ人の血を受け継ぐブルームに対する、人々の狭隘な態度を取りあげたい。ブルームと人々の関わりが際立っているのは、第6挿話でのディグナムの埋葬に関わる場面である。冒頭の葬式馬車に乗り込む際、マーチン・カニングムが「みんな揃ったかね？ 乗れよ、さあ、ブルーム」(U: 6.8)と指示している。ブルームは「みんな」の輪の外の間人であるということになる。さらにカニングムは、車窓から高利貸を目のあたりにして、「われわれは一人残らず彼のところに行ったことがあるはずだ」(U: 6.259)と語った後、ブルームと目が合い、「まあ、例外もあるだろうが」(U: 6.261)と修正している。ブルームに対する密かな疎外はこの後も続く。

第7挿話の新聞社の場面では、新聞売りの子もたちが広告の注文のために通りを歩く、ブルームの偏平足の歩きぶりを真似する(U: 7.444-50)。そして同僚たちが窓からその様子を眺めて笑っている。それに加え、広告の注文からの帰りに、ブルームは編集長から陰険な回答を受ける(U: 7.980-94)。また第8挿話では、軽食のために立ち寄ったデイヴィ・バーン酒場で、酒場の常連のノージー・フリンが主人に、ブルームが異端者の「フリーメイソン」(U: 8.1151)であるとの情報を告げている。さらに第10挿話では、貸本屋で本を漁るブルームの後ろ姿を眺めながら、レネハンがその人格を見下すかのように、かつて慈善パーティの帰りに彼の妻モリーの体に触ったことを面白おかしく語っている(U: 10.551-60)。人々は口外するわけではないものの、ブルームが自分たちとは異なった、外側の人間であるとの認識を共有している。

こうした嫌悪が爆発するのが第12挿話のバーニー・キアナン酒場であり、「市民」と呼ばれる民族主

義者を中心に、ユダヤ人としてのブルームへの攻撃が始まる。この挿話はキュクロプスという単眼巨人の一人とオデュッセウスとの対決を背景とし、民族主義者の外国人嫌悪を露呈する物語になっている。いわゆる「われわれ」と「かれら」という対立論理によって立ち、ブルームを「かれら」の側に位置づけている。この対立は「市民」の狭隘な民族主義を通して、アイルランドの民族主義全般への風刺と捉えられてきた。「市民」は酒びたりで偏狭な人物というのが一致した見解であった。

そうした民族主義者に対する視線に反論したのが、『ジェイムズ・ジョイスと民族主義』のノーランである。「市民」の語る反英感情にも真実があり、ジョイスの評論とも重複する点が多い、というのがその概要である。2年前にダフィが『サバルタンの「ユリシーズ」』で、実験的な『ユリシーズ』の文体をIRAの爆弾と称した。それと対照的に、ノーランは「市民」とブルームの対決を検討し、「市民」賛美という驚くべき結論に至った。アイルランドの歴史に鑑みるなら、大飢饉に対する英国の無策は無視できない。この悲劇により多くのアイルランド人が海外に移住し、その後の歪んだ社会構造を生み出すこととなった。同時に英国によるアイルランドの土地の収奪もあり、小作人たちの追放もあった。民族主義はこうした状況を背景に誕生した。ノーランの「市民」賛美はそのような民族主義を基礎としている。

しかしながら、EU加盟によってアイルランドにも多くの移民を抱える時代が到来した。国家とは多様な人種の混合であるとする、ブルームの宣言を再認識すべき時期かもしれない。2016年は1916年の復活祭蜂起百年ということで、蜂起の拠点となったGPOを中心に、軍隊や警察のパレードにより市内が祝祭の空間になった。この蜂起の後にジョイスは第12挿話の「市民」とブルームの対立を描いた。そのためジョイスが復活祭蜂起や第一次大戦の響きをも、『ユリシーズ』に取り入れたとこれまで指摘されてきた。

スプーによれば、スティーヴンの抱える悪夢としての歴史は、これらの出来事を背景にしているという。おそらく第12挿話における1803年の蜂起を先導したロバート・エメットの処刑、あるいは第15挿話における1798年の蜂起にまつわるクロッピー・ボーイの処刑など、いずれも復活祭蜂起の処刑と連動しているかもしれない。1993年のEUへの加盟、ならびに2007年の和平協定は、その悪夢への終結と思われる。そうであるなら、ブルームの人物造形も、この歴史の流れを見据えたものとして解釈する必要があるだろう。

復活祭蜂起に参加した人物の一人として、ロジャー・ケイスメントがいる。1904年当時もイギリスの官僚として働き、栄誉の称号を受けた経験がある。彼はコンゴでのベルギーの搾取を告発した人物であり、ジョーゼフ・コンラッドに『闇の奥』（1899）を着想させたと言われている。奇妙なことに、同時期にイギリスはボア戦争（1899-1902）を開始していた。帝国主義支配ということでは、ベルギーも英国も同じである。その支配の構図は英国のアイルランド支配にも当てはまるところだった。こうしてケイスメントは、第一次大戦において英国と連合していたかつての友好国フランスの救援を避け、ドイツからの武器の調達を引き受けた。が、その動向が事前に発覚し、反逆罪で処刑されることになった。「市民」がケイスメントをイギリス系アイルランド人と批判するとき、彼はこの歴史の流れを意識でき

ていない。ジョイスは「市民」にケイスマントを批難させることで、民族主義をも批判して見せたのだろう。

1904年のアイルランドは平穏であった。ブルーム一家の力学に英国とアイルランドの関係を読み込む批評家もいる。英国側から読むなら、1872年には国教会の制度を廃止し、国教会の資金を教育向上のために拠出した。さらに土地の分配も進められ、すでに土地所有者の数も増加していた。それに加え、英国はアイルランドに1913年の国会で、自治権を与える法案を通過させることにもなる。これら一連の政策は英国の「親切にして自治をつぶす」(Shloss)ものとして受け止められていたが、アイルランドにとって益するところが大きであった。そしてこの力学がブルーム一家に援用され、モリーに対するブルームの寛容な姿勢にその政策が認められるという。

家庭の秩序と国家の秩序との間には連動性がある。したがって、モリーの不義密通に対するブルームの無為には疑問が残る。時代は変貌し、女性の力が高まってきた。しかしながら、この事情がアイルランド社会において通用したわけではない。不義密通が国家への侵入と相同であるとすれば、ブルームの立場は、英国支配下のアイルランドの状況そのものである。が、ブルームはそのような大きな物語を想い描くことはない。帰属すべき国家を持ちえないように、帰属すべき家もありえない。ブルームの独白には国際性という意識が色濃い。彼に帰属願望がないわけではないが、父親と同じくブルームにとっても、アイルランドは仮の国家にすぎない。この事情は作者ジョイスのものであっただけでなく、今日のアイルランドに住む多くの移民が抱える問題でもあるだろう。

実のところ、英国のアイルランド支配は不義密通になぞらえられた。ブレフニの領主オルークの妻ダーヴォギラがディアルムイドに惹かれ、オルークの報復を恐れたディアルムイドが英国に援軍を頼んだ。こうして英国によるアイルランド支配が始まった。この観点からのアイルランド史は第2挿話において、ディージー校長によって語られ(U: 2.390-94)、さらに第12挿話においても「市民」が「こっちが連中をはいりこませたわけだからな。うん、おれたちが連れて来たようなもんだ。あの姦婦と間男がサクソンの泥棒どもを連れて来たんだ」(U: 1156-58)と語っている。

デイヴィッド・ロイドによれば、「リトル・ブリテン通り」の酒場を拠点に、「植民地アイルランドの事情」が英国による「粗悪化」(adulteration)として提示されているという(Lloyd, 106)。さらに言えば、チャールズ・スチュアート・パーネルとオシー夫人との密通も、アイルランドの自治権獲得運動に与えた打撃として、第16挿話のテーマとなっている。アイルランドにおいて、不義密通と植民地支配は人々の意識において連動している。

モリーの反論

モリーの人物像をめぐるのは、第4挿話の自宅の寝室での夫ブルームとの口数の少ない会話が記され、第10挿話でその「腕」(U: 10.222)が点描されたにすぎない。そして第18挿話に至るまで、モリーが物語に登場することはない。この不在のため読者が抱くモリーの人物像についての情報はほとんどすべて、ブルームの意識やダブリンの人々の主観的な言葉によって構築されている。したがって、第18挿

話にいたるまでのモリー像は、虚構の中ではぐくまれた、虚構の人物として提示されている。そうした男たちのモリーは、一様にセックス・シンボルとして定立されている。

その一方で、彼女の独白からは平凡な夫婦の一日も想定される。彼女の独白は「亭しゅ閑ばく」(U: 18.3) のブルームへの不満から始まっている。裁縫、料理、洗濯といった家事に追われる日常に若き日の情熱をそがれ、今や、ほとぼしる不満こそが彼女の存在を問う糸口なのかもしれない。そこには要約することのできない、彼女の様々な人生経験が集積している。文学と政治に関心のある研究者 C. L. イネスは、モリーの独白に女性の自立を読み取り、こう述べている。「耳にされることも、また文学的な芳香もない彼女の独白は、一つの物語の終わりであると同時に、女性が完全な声を持ちえるための、新たな破壊的な物語の始まりである」(Inness, 74)。

事実、モリーの流れるような独白は、男たちの偏見への反論で満ちている。彼女は過激にも、「男たちなんてゆっくりまわる毒をのませてこそすべきよ」(U: 18.1243) と不満を隠さない。「男のうちの半ぶんくらいはお茶を持って来い/トーストを両側にバターをぬって持って来い/うみたて卵を持って来い」(U: 18.1243-34) と、妻たちに命令を下しているからだ。さらにモリーは酒におぼれる男たちについて、「男の言う友情ってのはおたがいにころしあってそれからお墓にうずめあうことなのね/みんな家には妻や子もいるのに」(U: 18.1270-72) と皮肉っている。その一方で、逆にモリーは女性を賛美して、「世の中が女の天下になったほうがずっとよくなると思う/女ならころしあったりすることはないだろうし」(U: 18.1434-36) と述べ、「男はどうしてうまれるの/どこで生きてられるの/めんどろをしてくれる母おやがいなければ」(U: 18.1440-42) とつぶやいている。

モリーの口調はきわめて挑発的で、「男があたしをくさりにつなごうとしたってそれはむり/いったんはじめてしまったらばかな亭しゅのやきもちなんて何がこわいものですか」(U: 18.1391-92) と語っている。そして夫ブルームに対しても、「不しぎみみたいな話よ/あんなにつめたい彼といっしょにくらしながらあたしがまだしわくちゃばあさんにならないなんて」(U: 18.1399-1400) と文句を言っている。さらにメイドも雇わず「奴れいみたいにはたらかされて」(U: 18.1079) いる日常に不満を抱き、「やれやれ死んでお墓の中に横になったらゆっくりできるでしょう」(U: 18.1103-4) と嘆き、「ああたすけてよこんなところからあたしをふん」(18.1128-29) と、獄舎のようなテキストからの脱出願望を口にす。このように、モリーの独白はブルームと過ごす日常に対する不満であふれている。生活費の乏しさについても、「あたしはいつもお茶を一つかみポットに入れたいのに彼はもっともらしくスプーンではかって」(U: 18.468-69) 入れると、ブルームの吝嗇を批判している。

モリーの独白からは家庭での実際にも明らかにされている。生活費はすべてブルームが握り、家の頻繁な転居もブルームが決めている。第4挿話でブルームが妻の朝食を用意しているため、読者は啞然とするものの、第18挿話はその背後にあるモリーの心情を詳細に伝えている。そのような夫の支配の下にありながら、家事を取り仕切っているのはモリーだ。娘ミリーの躰にも気をつけ、叱咤したり、衣服を繕ってやったりしている。朝食の準備をしながらブルームが鍋を焦がしたことも知っている。そして普段の彼女は、台所の手入れのみならず、食材の買い出しにも行っている。実際、ボイランとの密通の前

に、彼女は雑誌や新聞紙の整理をするだけでなく家の掃除もしている。息子ルーディの死にモリーも涙している。ブルームの精神的な波長も共有している。その意味で、モリーの独白は先行の挿話の情報を修正することになる。ブルームの想い描くのとまったく別のモリー像が見えてくるだろう。

ブライアン・メリマンの『真夜中の法廷』(1780)では、女性の性をないがしろにする男たちが審判されている。モリーも真夜中の法廷の女性たちと異ならないが、その独白は夫の性的怠慢への不満というよりも、むしろ夫の関心を取り戻すことに向けられているのではなからうか。モリーとブルームの夫婦関係は不動なものではもちろんない。モリーはブルームの求婚までの流れを巧みに演出していた。彼女はブルームの求婚を受け入れる直前、「わたしにはわかった/女とはどういうものか彼にはわかってることが/感じ取っていることが/わたしにはわかった/いつだって彼をあやつれるということが」(U: 18.1578-80)と意識していた。

この了解の下、彼女はしばし沈黙した後、ブルームの求婚を受け入れたのである。その短い沈黙の間、「あたしはもうひとりと同じほど彼のことが好きだと思った」(U: 18.1604-45)と語っているように、モリーはジブラルタルの恋人マルヴィー中尉のことを想起し、ブルームも同じ男であると認識したのである。こうして彼女はブルームに自らが「花だ」ということを再度語らせ、ブルームの求婚を受け入れたのである。モリーは自らがホースの丘に咲く山の花であると同時に、ジブラルタルの山に咲く花であったことも忘れてはいない。

モリーがブルームを受け入れた背景には、当時のアイルランドの結婚事情もあったであろう。結婚は経済とも無縁ではない。すでに第13挿話においても、娘ガーティ・マクダウェルの結婚願望が縷々と語られていた。職を持たないかぎり、女性の末路は不運な状況にあった。修道院に入るか、家庭で屈辱的な労働を強いられるか、あるいは娼婦に転落することもあった。こうした状況を描いたのがシングの『谷間の陰』(1904)であった。イプセンの『人形の家』(1879)の主人公と同じノーラという名前の若い妻が、放浪者とともに老いた夫の家を出て、自立する物語である。シングはノーラのセクシュアリティを前景化したため、観客の罵声を浴びることになったが、モリーの独白はそのノーラの心情をさらに詳らかに示している。

そのためモリーは常識的な考えを否定することもある。とりわけ性にまつわるモリーの赤裸々な告白は、女性に対する時代の認識を破壊している。それに加え、放尿、生理、放屁といった身体的機能への言及は、これまでの文学が空白にしてきたところである。こうした身体的な描写は『ユリシーズ』全体の基調である。それに加え、モリーの独白は様々な文体の縫合である。その意味では、モリーは新しい女性であるだけでなく、平凡な主婦、サディスト、娼婦、ロマンチストなど様々なレッテルが貼られてしかるべきである。彼女が旧態依然とした社会を弾劾する人物であることに違いはない。

アイルランドのフェミニズム思想は早くから起こっていたが、民族主義の背後に位置したまま、女性はその声を発するのは1970年代以降となる。1973年の政教分離後、少しずつ女性の発言が高まったのが実情である。モリーの独白はそうした流れの先を示すものであったかもしれないが、それでも彼女の独白がそのまま受容されることはなかった。モリーの独白はアイルランドでは未だ消化されていない。

ブルーム一家をめぐる書き換えの一つとして、ピーター・コストロの『レオポルド・ブルーム——伝記』（1981）がある。ブルーム一家のその後を描いた小説である。モリーが事故で亡くなり、昔の恋人のミセス・グリーンとブルームの回顧録を綴っているにすぎない。その一方、J. M. クッツェーの「リアリズムとは何か？」（1999）では、作者コストロがモリー救出の物語『エクルズ通りの家』という小説を書いた設定である。モリーをエクルズ通りの家から解放し、市内へ送り出す物語であるという。獄舎に幽閉されているモリーの日常に新たな地平を与えた物語であるが、その内容は描かれてはいない。そのタイトルを少し変え、まさしく『エクルズ道路の家』（2002）を書いたのが、ジュディス・キッチンである。

スティーヴンと国家

第1挿話でマーテロ塔から海岸へ向かいながら、スティーヴンのシェイクスピア論が話題にされたとき、ヘインズがそれは「逆説のようなもの」なのかと尋ね、マリガンが「おれたちだってワイルドや逆説は卒業した」（U: 1.553-54）と答えている。オスカー・ワイルドへの言及はマーテロ塔の塔頂でのスティーヴンとマリガンとの会話にも、「鏡にてめえの顔を見ないキャリバンの怒り」（U: 1.143）という『ドリアン・グレイの画像』（1891）のエピグラムへの引喩がある。ワイルドの同性愛事件の裁判は1895年のことで、その悲劇は1904年の人々の記憶に真新しい。

スティーヴンは英国の文壇で認められようとしたアイルランド人作家を「宮廷道化師」（U: 2.44）と呼んでいるが、その一人がワイルドであることは、ジョイスの「オスカー・ワイルド——『サロメ』の詩人」において、ワイルドを「宮廷道化師」（CW, 202）と呼んでいることにも明らかだ。そしてスティーヴンがワイルドとの距離を測定するとき、その意識には国家や物語が念頭にあっただろう。スティーヴンはアイルランドに固執しているのである。

かくしてスティーヴンは第7挿話で「プラムの寓話」という風刺的な話を語り、ダブリンが麻痺した都市であることを指摘している。また第9挿話では国家という側面からシェイクスピアを語りながら、植民地支配下の都市ダブリンにおける芸術家の使命を示唆していた。『ハムレット』の殺人劇はデンマークの出来事であるだけでなく、ボーア戦争での大英帝国による虐殺と連動している。さらに第15挿話では英国兵と口論しながら、「自らは国家の召使ではなくその主人である」といった趣旨のことを語っている（U: 15.4471-73）。そして第16挿話においてはブルームに向かって、「アイルランドが大事なのは、それがぼくのものだからです」（U: 16.1164-65）と述べている。

ひるがえって、スティーヴンは第1挿話において、「ぼくは二人の主人に仕える召使」（U: 1.638）であると語っていた。この事情は『若い芸術家の肖像』においても再三にわたって語られてきたことである。スティーヴンは国民性、言葉、宗教という網に囚われていることを認識し、その網を逃れようとしていた。したがって、第1挿話における「召使」というスティーヴンの発言は、そのまま受け止めるかぎり、迷宮から脱出したダイダロスではなく、海中に没したイカロスとしての運命を語っていることになる。

それでも第9挿話では自らが「タゲリ」であると、4度も(U: 9.953, 954, 976, 980), あたかも『若い芸術家の肖像』の最後のアイルランドからの離脱の宣言を正当化するかのように繰り返している。「タゲリ」とはダイダロスにその才能を妬まれ、海に突き落とされた甥の化身である。スティーヴンは「天才は間違いを犯しませんよ」(U: 9.228)と述べているように、決して敗北を認めていない。こうして国家の「召使」であるよりも、その「主人」であるとの発言が生まれている。

ここで再びワイルドの逆説に戻りたい。ワイルドは唯美主義者と知られ、人生は芸術を模倣するという逆説を語った(Wilde, 933)。芸術は自然に掲げた鏡であるという、自然主義のテーゼを反転させた姿勢は、ワイルドの師匠であるウォルター・ペイター経由である。もちろん『ドリアン・グレイの画像』はその立場から逸脱した作品と思われるが、ワイルドの文学が社会との抵触を欠いていることに変わりはない。スティーヴンとワイルドとの決別はそのあたりの事情による。スティーヴンの芸術は社会の改革に向けられている。国家よりも芸術家としての自己の優位を語るのも、自らの芸術による社会の変革の可能性を念頭に入れてのことであろう。スティーヴンは『若い芸術家の肖像』においてもキリスト幻想を抱いていた。『ユリシーズ』においても同じく、「救世主としての芸術家」(Lewis, 48)の相貌を読み取れる。

スティーヴンは英国の植民地支配や文化に嫌悪を抱きながら、その感情を発散する方策をもってはいない。暴力的な対立はブルームと同じくスティーヴンの解決策ではない。そもそもスティーヴンの意識を構築しているのは英国文化である。そのような状況において可能なのは、英国への文学的な「報復」(Gibson)であるが、それは作者ジョイスの領域である。とすれば、スティーヴンやブルームの無抵抗な姿勢に対し、ジョイスは一線を画していたことになる。そうであればスティーヴンもブルームも、作中に位置付けられた単なるキャラクターにすぎない。

新たな課題

おそらく2007年の和平協定により、英国との和平も締結され、スティーヴンが意図する民族の良心の問題も、ブルームの多文化主義も、あるいはモリーの獄舎としての家庭からの離脱も、過去の歴史に埋もれ、その起爆力を喪失しているように思われる。そうであるなら、今後のジョイス研究の方位が問われよう。もちろんすべての問題が解き明かされたわけではないが、新たな時代の読みが始動されなければ、いずれの研究も考古学的な発掘作業に終始してしまう。

それでも『ジェイムズ・ジョイス・クォーターリー』は健在であるし、その他の研究誌も定期的に刊行されている。そればかりかおびただしい数の研究書も出版されている。そのような状況を考えながら、悲観的な評言で済ませることはできない。それぞれの新しい研究を精査し、どの方向が見えているのか判断すべきだろう。折しも2015年、『ジョイスの声』という厚い研究書がUCDより刊行された。このあたりを参考に今後の方位を見定めるべきかもしれない。出版予定の研究書も多い。

引用・参考文献

- Chen, Vincent. *Joyce, Race, and Empire* (Cambridge: Cambridge UP, 1995).
- Coetzee, J. M. *Elizabeth Costello* (London: Vintage, 2003).
- Costello, Peter. *Leopold Bloom: A Biography* (Dublin: Gill and Macmillan, 1981).
- Duffy, Enda. *The Subaltern Ulysses* (Minneapolis: U of Minneapolis P, 1994).
- Fairhall, James. *James Joyce and the Question of History* (Cambridge: Cambridge UP, 1993).
- Fogarty, Anne and Fran O'Rourke, ed. *Voices on Joyce* (Dublin: UCD P, 2015).
- Foster, John Wilson. *Colonial Consequences: Essays in Irish Literature and Culture* (Dublin: Lilliput, 1991).
- Gibbons, Luke. *Transformations in Irish Culture* (Cork: Cork UP, 1996).
- Gibson, Andrew. *Joyce's Revenge: History, Politics, and Aesthetics in Ulysses* (Oxford: Oxford UP, 2002).
- Gillespie, Michael Patrick and Paula F. Gillespie. *Recent Criticism of James Joyce's Ulysses* (New York: Camden House, 2000).
- Inness, C. L. *Woman and Nation on Irish Literature and Society, 1880-1935* (Georgia: U of Georgia P, 1993).
- Kearney, Richard. *Transitions: Narrative in Modern Irish Culture* (Manchester: Manchester UP, 1998).
- Kiberd, Declan. *Inventing Ireland: The Literature of Modern Nation* (London: Vinatge, 1995).
- Kitchen, Judith. *The House on Eccles Road* (London: Penguin, 2002).
- Lewis, Pericles. *Modernism, Nationalism, and the Novel* (Cambridge: Cambridge UP, 2000).
- Lloyd, David. *Anomalous States: Irish Writing and the Post-Colonial Moment* (Durham: Duke UP, 1993).
- Nolan, Emer. *James Joyce and Nationalism* (London: Routledge, 1995).
- Norris, Margot. *Virgin and Veteran: Readings of Ulysses* (New York: Palgrave Macmillan, 2011).
- Shloss, Carol. "Molly's Resistance to the Union: Marriage and Colonialism in Dublin, 1904," in *Molly Blooms: A Polylogue on "Penelope" and Cultural Studies*, ed. Richard Pearce (Wisconsin: U of Wisconsin P, 1994) 105-118.
- Spoo, Robert. *James Joyce and the Language of History: Dedalus's Nightmare* (Oxford: Oxford UP, 1994).
- Wilde, Oscar. *The Collected Works of Oscar Wilde* (London: Wordsworth, 1997).